

グループワーク対策講座 講義編

第1章 グループワーク（GW）・グループ・ディスカッション（GD）とは？

近年、地方公務員試験の2次試験以降でGW・GDを導入する自治体が増加しているが、これらの試験は、面接と異なり、個人でできることに限りがあることから、対策に頭を抱える受験生も多いことと思われる。本講義では、公務員試験におけるGW・GDの全貌を明らかにするとともに、個人でできる対策についても講義する。そもそも、GW・GDとは、なにか。簡潔にまとめると、下記のとおりである。

GW：受験者が一つのテーマについて、数人（5～8人のところがほとんど）一組で、討論をしながらホワイトボードや模造紙に提案をまとめて発表する形式で、コミュニケーション能力はさることながら、発想のユニークさやチームの一員としての貢献度などを評価する試験。

GD：受験者が一つのテーマについて、数人（5～8人のところがほとんど）一組で、各自の見解を表明した後に、30～40分程度討議をすることで、プレゼンテーション能力やコミュニケーション力などを評価する試験。

チーム作業の有無という違いはあるものの、**実は両者の違いはそれほど大きなものではない**。事実、これらの試験は地方公務員試験で多く採用されているが、両方とも導入しているところはなく、どちらかの試験でもって、受験生の公務員としての適性を評価している。

コロナ禍では、感染症拡大防止の観点からGW・GDの中止を打ち出す自治体が多かったため、GW・GD対策をすることなく内定獲得した先輩が多く、それゆえ、筆記試験対策に比べGW・GD対策を軽視する受験生が多いと思われるが、令和4、5年度試験を見る限り、コロナ禍により中止だった自治体の多くにおいて試験が復活していることから、今後も採用試験においてGW・GDの導入を打ち出す自治体は増加していくものと思われる。ちなみに、試験におけるGW・GDの重要度については、各自治体の試験実施状況からある程度推測できる。下記は、令和4、5年度試験でGW・GDを実施した自治体のうち、東京都、大阪府、広島市、石川県の実施状況である。東京都、大阪府は3次試験でGWを、広島市は3次試験、そして石川県は2次試験でそれぞれGDを実施している。

東京都 IB 行政（新方式）

（4年度）

採用予定者数	申込者数	受験者数	1次合格者数	2次受験者数	2次合格者数	3次受験者数	最終合格者数
105	697	521	352	311	206	189	139

（5年度）

採用予定者数	申込者数	受験者数	1次合格者数	2次受験者数	2次合格者数	3次受験者数	最終合格者数
174	560	433	366	315	259	253	230

大阪府（行政）

（4年度）

採用予定者数	申込者数	受験者数	1次合格者数	2次受験者数	2次合格者数	3次受験者数	最終合格者数
110	1,978	1,158	562	312	221	201	147

(5年度)

採用予定者数	申込者数	受験者数	1次合格者数	2次受験者数	2次合格者数	3次受験者数	最終合格者数
110	1,687	1,032	552	312	222	201	169

広島市（行政事務）

(4年度)

採用予定者数	申込者数	受験者数	1次合格者数	2次受験者数	2次合格者数	3次受験者数	最終合格者数
75	592	401	261	244	174	165	113

(5年度)

採用予定者数	申込者数	受験者数	1次合格者数	2次受験者数	2次合格者数	3次受験者数	最終合格者数
80	514	362	293	280	194	188	110

石川県（行政）

実施年度	採用予定者数	申込者数	受験者数	1次合格者数	2次受験者数	最終合格者数
4年度	58	273	211	100	—	77
5年度	51	217	168	100	—	73

上表の結果に加え、いずれの自治体も GW・GD のほか個別面接も実施しており、個別面接の方が高い配点であることを考慮すると、**GW・GD は受験生を一気に篩にかけるというものではなく、ネガティブ・チェックの要素が強い試験**であると言える。とはいっても、長い採用試験期間の最終場面に、一人では準備困難な試験が待ち受けているのは、受験生心理からすれば相当の苦痛であろう。しかも、諸君は、コロナ禍の下、高校在学中もしくは大学入学直後から学生生活において多大な制約を受け、サークル活動はもちろん、ゼミ活動もままならなかった世代である。それゆえ、集団で議論や共同作業を行う経験をほとんど持たないまま、公務員試験を迎えるという人も相当数いるはずである。そのような人にとっては、GW・GD は非常に大きな壁として立ちはだかる存在であるといえよう。

また、個別面接よりは低い配点といったものの、1次試験で課される筆記試験（教養 + 専門）よりも高いところが多いため（例えば、石川県では、1次試験の全科目（教養試験 + 専門試験 + 論文試験）の合計点が 300 点満点であるのに対し、2次試験で課される集団討論試験は 400 点満点である）、最終合格を見据えると、筆記試験対策よりも GW・GD 対策を重視する必要がある。

ちなみに、国家公務員試験では、総合職試験（教養区分および院卒区分）の2次試験で政策課題討議試験が実施されているのを除くと、外務専門職試験および裁判所職員総合職試験の2次試験くらいでしか実施されていない（いずれも集団討論）。それゆえ、総合職を本気で目指さない限り、国家公務員志望者には GW・GD 対策は不要と思われがちであるが、国家公務員一般職の官庁訪問において、一部省庁で GD が実施されているため、「国家公務員志望者には GD・GW 対策は不要！」と決めつけないでほしい（もちろん、地方公務員ほど多くの時間を割く必要はない…）。

なお、地方自治体採用試験の2次試験以降で課される GW・GD であるが、実施形態・所要時間は自治体によって様々である。そこで、次章では、最もハードな国家公務員総合職試験（教養区分）を例に、GD・GW の実施方法について講義する。後述のとおり、どの自治体も総合職試験を一部割愛した形で実施しているので、受験生諸君は参考にしてほしい。